

家庭教師ヒットマン  
REBORN—ウルトラロマ  
ンティック—

薔薇餓鬼

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ボンゴレファミリーの次期ボスである沢田綱吉が秀知院学園にて送る青春の物語である。

# 目次

標的(ターゲット) 1	沢田綱吉は転校す
る	1
標的(ターゲット) 2	白銀御行は紹介す
る	9



# 標的（ターゲット） 1 沢田綱吉は転校する

虹の代理戦争から2年が経過。世界最強のマフィアの次期ボス候補である沢田綱吉さわだつなよしは高校2年生になった。

そして現在ツナは、

「並盛高校から転校して来た沢田綱吉です。よろしくお願いします」

なんと超がつく程のエリート校、秀知院学園に転校していた。

（ほ、本当に入学できちゃったよ……）

生徒たちが拍手を送る中、ツナの脳裏には去年の出来事が浮かんでいた。

時は9カ月前。沢田家。ツナの部屋。

「ツナ。お前には来年から秀知院学園に通ってもらおう」

「はあ!?!」

黒い帽子に黒いスーツに身を纏い、帽子にカメレオンを乗せ、胸に黄色いおしやぶりを携えた赤ん坊の発言を

聞いてツナは驚きの声を上げた。

この男の名はリボン。ツナの家庭教師かてきよであると同時に殺し屋である。殺し屋としての腕は

世界最強。ボンゴレファミリーの現ボス、ボンゴレIX世ノイが最も信頼する殺し屋である。

「どういふことだよりリボン!! 秀知院ってあのエリート学校だろ!?!」

秀知院学園。かつて貴族や士族を教育する機関として創立され、200年の歴史を持つ由緒正しい名門校。貴族制が廃止された今もなお、富豪名家に生まれ、将来国を背負うであろう人材が数多く就学しており、偏差値77という超エリート校。ツナが現在、

通っている並盛高校は全国的に見ても平均的な偏差値の学校。そんな高校に入学するのですら苦戦したツナが入れるような高校ではない。

「簡単な話だ。お前はあのバミューダに勝つだけの強さを持つてるが頭（しっぽ）の方は全然だからな。マフィアのボスたるもの腕つぶしだけじゃダメだからな」

「俺はマフィアのボスにならないって言ってるだろ!!」

ボンゴレファミリーの次期ボス候補であるツナであるが当の本人は継ぐ気はない。

「とにかくだ。今から3月まで死ぬ気で勉強してもらおうぞ」

そう言うトリポーンは懐から愛銃を取り出すと、銃口をツナの額に定めた。

「ま、待ってて!! 俺はまだやるなんて一言も!!」

「いつペン死んでこい」

ズガン!!

リポーンはツナの意味を無視しツナの額におもいつきり弾丸をぶち込んだ。撃たれたツナはゆっくりりと倒れていく。

（俺……死ぬんだな……もつたいたいな……死ぬ気で勉強すれば秀知院に入れたかもしれないのに……死ぬ気で勉強すればよかった……）

薄れゆく意識の中でツナは後悔する。そしてツナは床に倒れ、動かなくなってしまう。

するとツナの目がカッと開き、額にオレンジ色の炎が灯った。そして着ていた服が破れてパンツ一丁となる。

「復活!! リ・ボン死ぬ気で勉強するー!!!」

「イツツ。死ぬ気タイム」

先程まで勉強を嫌がっていたツナであるが自ら参考書を手に取って問題を解いている。

今、リボンがツナに撃つたのは死ぬ気弾。ボンゴレに伝わる特殊弾である。死ぬ気弾を額に撃たれた者は一度、死んで死ぬ気になって甦る。死ぬ気になる内容は死ぬ前に後悔したことである。逆に言えば死ぬ前に後悔していなければそのまま死んでしまうというリスクが高過ぎる弾でもある。



そして勉強開始から8カ月間、死ぬ気で勉強させられたツナは秀知院学園の編入試験に合格するという偉業を達成。

だが

(これからどうすればいいのー!?)

秀知院学園の生徒の大半は幼等部から大学までの一貫校。故にほとんどの生徒が幼馴染。しかし編入して来たツナに知り合いなどいる訳もない。しかも秀知院学園の生徒のほとんどは金持ちの息子もしくは令嬢。ツナのような生徒は全体の1%しかない。ツナはどうしていいかわからず頭を抱えてしまっていた。

「相変わらずのダメツナだな。自分から話かけなきゃ友達はできねえだろうが」

「え?」

頭を抱え下を向いていたツナであつたが自分の名前を呼ぶ声がした為、前を向いた。そこにはツナの机の上に当たり前のように佇んでいるリボンがいた。

「ちやおつす」

「何でここにいるんだよりリボン!」

「何言つてんだ。俺はお前の家庭教師だぞ。生徒の様子を見に来るのは当然だろうが」

「家庭教師は学校じゃなくて家に来るものだろ!!」

先程までお先真つ暗な状態なツナであったが、リボーンのせいでもいつものようにツツコミを入れざる負えない状況に陥ってしまった。どこからともなく現れた謎の赤ん坊の存在に生徒たちは戸惑いを隠せないでいた。

「じゃ、喋る赤ん坊……?」

「幼等部の子が迷い込んだんでしょうか……?」

目つきの悪い金髪の青年と桃色の髪の少女がリボーンのことを見ていた。

金髪の青年の名は白銀御行<sup>しろがねみゆき</sup>。秀知院学園の生徒会長である。白銀もツナと同じく一般家庭の生まれで高校から秀知院学園に入学した人物である。

桃色の少女の名は藤原千花<sup>ふじわらちか</sup>。秀知院学園の生徒会書記である。曾祖父が元総理大臣、叔父が現職の省大臣という血統の持ち主である。

「それにボンゴレに入る奴がいねえかと思つてな」

「そつちの方がメインだろ!!」

「ここにいる奴らの99%は金持ちだからな。こいつら全がボンゴレの傘下に入りや金もたんまり入る。金さえありあ賭博に武器の製造や密輸、殺し屋への依頼金やファミリーの買収。何でもできるからな」

「何とんでもないこと考えてんだよ!!」

「つー訳だ。今からスカウトしてこい」

「何がっー訳だよ!! する訳ないだろ!!」

「うるせえぞ」

「ゴフツ!!」

往生際の悪いツナの顎にリボーンが上段蹴りを喰らわせる。リボーンの上段蹴りによってツナは宙を舞い、おもいつきり地面に叩きつけられた。

「何すんだよりリボーン!!」

「俺に逆らったお前が悪い」

「どう考えてもお前のせいだろ!!」

「生徒の分際でこの俺に逆らってんじゃねえ」

「グフツ!!」

リボーンは机の上からジャンプするとツナの腹部に飛び蹴りを喰らわせる。蹴りを喰らったツナはおもいつきり後ろに飛ばされ教室の壁に激突する。

しかし教室にいた者は赤ん坊にこんな真似ができると思っておらずツナが勝手に吹き飛んだものだと思っていた。

入学して早々に生徒から変な目で見られるツナであった。

本日の勝敗。  
ツナの敗北

## 標的（ターゲット） 2 白銀御行は紹介する

リボーンのせいで入学初日から変な目で見られるようになってしまったツナ。

（結局、誰とも話せなかった……）

時は流れて放課後。なんとか1日が終わった。しかし朝と何も状況が変わっておらずツナは誰とも話すことができず椅子に座って頭を抱えてしまっていた。

（マジで最悪だ……これからどうしよう……）

朝の一件が噂でひろまりツナはクラスの生徒だけでなく他のクラスの生徒からも変な目で見られてしまっていた。ツナはお先真つ暗な状態であった。

「だ、大丈夫か？」

「え？」

そんな中、ツナに話しかける人物がいた。ツナは視線を上に向ける。そこには心配そうな表情でツナのことを見守る白銀がいた。

「沢田でよかったよな？ 俺は白銀御行。この学校の生徒会長をやってる」

「せ、生徒会長!？」

白銀はツナに自己紹介すると同時に自身が生徒会長であるということ进行明かす。白銀が生徒会長だということを知ってツナは驚きの声を上げる。

「いや……なんか上手く馴染めてなさそうだったからな……放っておけなくてな……」

「あ、ありがとう……」

「せっかくだ。まだこの学校こともわからないと思うから俺が校内を案内してやるよ」

「え……でも……」

「困っている生徒を助けるのは生徒会として当然のことだ。それに助けるといっても校内を案内するだけ。これくらい朝飯前だ」

白銀の案内の元、ツナは白銀と共に校内を回る。

「本当に広いねこの学校」

「まあな。俺も入学当初はよく迷ったものだ」

「入学当初って……もしかして御行つて外部受験？」

外部受験。幼等部からエスカレーター式で上がつて来た者たちとは違い、他校の中学から秀知院に受験した者のことである。

「ああ。そうだ。沢田と違つて途中で転校して来た訳じゃないけどな」

同じ外部受験でも白銀は入試を受けて入試し1年の入学式から秀知院にいる。一方でツナは2年から秀知院に編入している。

「俺も最初は大変だったよ。知つてる奴は誰にもいねえし混院つて言われて差別された」

「こんんいん？」

「昔から秀知院にいる奴らのことを純院。俺たちみたいな外部の生徒を混院つて呼ばれるんだ」

「成る程……」

差別という単語を聞いてツナは嫌な気持ちになる。中学時代、勉強も運動も何もでき

ずダメツナと呼ばれていたツナにとって気持ちのいいものではなかった。

「心配すんな。全員が全員、そんな風に見てる訳じゃない。それに俺もお前も同じクラスで外部入学だ。これから仲良くしようぜ」

「うん」

ツナの心情を察したのか白銀はツナを元気付ける為にそう言った。白銀の言葉を聞いてツナは安堵する。

この後もツナは白銀と共に学校内の回っていく。

「ここが生徒会室だ。誰でも自由に入れるようになってるから好きな時に来てくれて構わない」

「好きな時に入っているの?」

「ああ。元々、先代の生徒会長が生徒の逃げ場としての機能をもたせる為に自由に入れるようにしててな。俺もそのルールを引き継いだんだ」

「へー。そうなんだ」

「せっかくだ。中に入らないか? 生徒会のメンバーを紹介したいんだ。無理にとは言わないが」

「いいよ別に。特に用事もないから」

白銀はツナが今後、生徒会室に来ることがあった時の際に他の生徒会メンバーしかい



ない場合のことを想定してツナに提案する。ツナは了承し2人は生徒会室の中へと入室する。

「あ。やっと来ましたよ」

「珍しいですね。会長が遅れて来るなんて」

生徒会室に入ると藤原と赤い瞳に長い髪を後ろで束ねている黒髪の少女がいた。

黒髪の少女の名は四宮かぐや。秀知院学園の生徒会副会長にして総資産200兆円、日本の経済界を牛耳る四大財閥の一角、四宮グループの令嬢でもある。

「ちよつ転校生を案内しててな」

「あー！ 沢田君だ！」

「藤原さん。人に指を指すのはマナー違反ですよ」

藤原は驚きの声を上げながらツナに向かって人差し指を向けた。かぐやは冷静な態度で藤原の言動を注意する。

「初めまして。私、秀知院学園で生徒会副会長をしています四宮かぐやと申します。以後、お見知りおきを」

「さ、沢田綱吉です。よろしくお願いします」

かぐやは自己紹介をした後、軽くお辞儀をする。ツナはかぐやの洗練された所作を見て動揺したのか動揺しながら自己紹介する。

「ふ、藤原千花です。せ、生徒会の書記をやってます……」

ツナと同じクラスである藤原は朝の一部始終を目撃している為、動揺しながら自己紹介する。

「藤原。そこまで動揺しなくても大丈夫だぞ。沢田はいい奴だぞ」

「良い悪い以前の問題ですよ！ 転校生初日にいきなりあんなアクションを起こす人に話しかける勇氣なんてありませんよ！」

（やっぱりそうなってるのか……）

藤原の言葉を聞いてツナは自分の予想が当たつていゝsということを確認する。

まさか赤ん坊がツナのことを蹴り飛ばせるだけの力があると思う者がいる訳ない為、自作自演で吹き飛んだということになっているのである。

「というかそもそも何で幼等部の子が秀知院ウチにいたんでしょう？」

「幼等部？」

「はい。どういう訳か知りませんが沢田君がアクションを起こした時になぜかウチのクラスに幼等部の子がいたんです。いつの間にかいなくなっちゃったんですけど」

「何かの見間違いではないのですか？」

「見間違いじゃないですよ。私以外の人も見てましたから」

「というか沢田。お前、あの子供と普通に会話してたよな。知り合いか」

「い、いや……」

白銀はツナはあの謎の赤ん坊について何かを知っているのではないかと思い、ツナに尋ねた。ツナは白銀に答えることができなかった。

(言える訳ねー！ リポーンが家庭教師で殺し屋だつて！)

勿論、リポーンの正体を知っているツナであつたが本当のことを言えば変な空気に自明の理である為、どう答えればいいのかわからないでいた。

その時だつた

「何を迷つてやがんだダメツナ。何も難しいことを聞かれちゃいねえだろうが。そんな調子じゃこの学校で孤立しちゃうだろうが」

「[[c]]」

(ま、まさか……!?)

どこからとなく知らない声が生徒会室に響き渡る。白銀たちは謎の声を聞いて周囲を見渡すが声の主を見つけることは叶わなかつた。しかしツナだけはこの声の持ち主を嫌という程、知っていた。

すると生徒会室の壁の一部が扉のように開いた。そこには小さな部屋ができていた。そして部屋に置いてある椅子に座つてコーヒーを飲んでいるリポーンがいた。

「ちやおつす」

「リボーン!!」